秀歌集４の序

草壁焔太

五年ごとに刊行するこのシリーズも、四冊目、その前に出された『五行歌の事典』が、最初の選歌集とすれば、五冊目となる。五行歌運動を始めてから、二十七年半、月刊誌『五行歌』は、この九月で三百二十九号となった。

そして、五行歌全体から秀歌を選んだ集が五冊目。よくやったと思う。というのも、もう次の秀歌集は、私の秀歌集ではないかもしれないと思うからだ。果たして、そのときまだ生きていたとしても、それだけの精神力があるかどうか、何の保証もない。

心のうちに、「もういいかな～」という気持ちもある。

しかし、代わりの人では難しいかとも思う。五行歌全体を見ていて、その将来を決められる人は、なかなか出ないだろう。まずは、その立場にいないといけないが、その立場には私がまだいるかもしれない。

そういう予想もできないこの先を思うと、この『五行歌秀歌集４』は、非常に重大な意味を持つ。私の締めくくりの選歌集だと、思うべきだからである。

この集の序を書き始める前に、いままでの三冊の序文を読み返し、そのついでにいままでの三冊のなかみも、読み返した。どの秀歌集も全身全霊をかけて選し、配列したものであったが、読みながら、忘れているものが多いのに驚いた。それだけでなく、歌のいいことにも驚いた。

一つ一つ、こんなによかったかと思う。驚きは、慄きにも近いものがあった。歌もよすぎるものは、慄きである。魂が震える。それくらいであって、初めて秀歌とはいえるものだ。改めて、「秀歌」というものの意味を知った気持ちになった。

とくに『五行歌秀歌集３』はよかった。そこで、今度の４を読み返すと、やはりいい。１、２よりも、かなりよくなっているように思える。

どこが？

それにこたえるには、かなり膨大なスペースが必要かもしれないが、一口に言って、歌の奥行き、よさの奥行きが違ってきたということであろう。１、２とよい歌を見ているうちに、うたびとの心も、歌もさらによくなってきたということなのだ。

例を挙げてもいいが、秀歌集の歌はすべてが例に値するから、あえて挙げない。みなさん

も、是非、いままでの秀歌集と読み比べていただきたい。

というのも、これだけよいものが、さらに進化するということを知ることが、重要だと思うからだ。それは、我々はもっとよくなる、ということを意味する。また、我々も五行歌もそうでなければならない。

この進化をもたらしているのは、思いの進化である。人の思いの表れた歌に感心する。すると、その思いは、心に取り入れられる。ところが、心は同じ思いを抱いていることにたえられない。同じでは面白くないから、思いをさらに一歩深める。こうして、みんな思いがそれぞれに進化し、得も言われぬ思いが歌になってくる。その凄みが3とこの4の歌なのである。

私は、このことを確認して、「ああ、よかったあ」と心の底から、安心した。五行歌はただときが過ぎただけではなかったのである。みんなの思いが、みんなに影響し合い、深さも、高さも、幅も、増してさらによくなっていたのだ。

こういうことを知るためにも、こういう秀歌集のようなシリーズは必要であろう。

こういう選集も五冊目となると、別の意味で相当に変化もしている。

まず、歌数が多いから、さまざまなジャンルに分けるのはいつもだが、この4では分け方がかなり変わった。これは、私の気持ちが変わったからだと言ってもいい。

1は三十四巻、2は三十八巻、3は三十九巻だったが、この4は、三十一巻となっている。一番、大きな変化は、高齢、闘病といった巻がなくなったことである。

その理由は、そういった項目の歌がかなり多くなっており、そういった見出しを巻名にすると、世の中真っ暗とでもいいたいような構成になるからである。

そこで、「生（せい）」「生活」といった巻でそれらを扱うようにした。例えば、病や療養は、現代の人々の生活の中に当然のようにあり、生、あるいは生活として考えられるからである。高齢についていえば、今の世の中では九十歳以上が高齢ではないかと思われるが、その水準は年々上がってきており、高齢という名詞でくくるのは、悲観的に過ぎると思われる。

だから、あえて高齢と断らなくてもいい、と考えたのである。

高齢がふつうになったとしたら、果たして高齢という言葉に意味があるだろうか。高齢の人のほうがよほど若いという場合も多い。生活も自由、生活の質も高い。

それで、「生」を感じさせる歌は「生」、生活の歌は「生活」、というものを意識させる歌として集めた。

それとともに4の巻名のもう一つの特徴は、動物とか、植物とか、百科事典にありそうな巻分けをやめたことである。私自身、百科事典好きのようなところがあって、いままでは動物、植物でやってきたが、それではいかにも詩的でない。

そこで、「木・花・実」「生き物」「海・山・空」といった巻名にした。

もう一つ、最初の巻は「宇宙・自己」としている。私は、この二つのものを同じものだと感じている。それはおかしいという人がいても、私はこの世は、宇宙と自己の対立関係からできており、それは同じものなのだという思いがある。私の勝手な思いといわれてもよい。人が「私」といい、「宇宙」というとき、それは同じことを言っているのだと思っているのである。

それが、私の思いであって、それによって、この秀歌集を編んでいる。したがって、この秀歌集は、私の秀歌集できわめて個性的なものだと言いうる。私としては、こういうものでさえ、個性によるものだと言いたいのである。

次に誰かが作れば、その人の個性によるであろう。

私自身は、自分の好きなようにして、非常に楽しかった。しかも、歌はそれぞれみんないい。一つ一つに心が震える。

この4で、私はもう一つ、変えた方針がある。それは、いままで、五行歌の会の同人会員だけでなく、できるだけ多くの人の作品を集めることを方針としていたが、主として同人会員の作品とするように変更した。というのも、同人会員は、自分の作品を永久に残したいという意思を持ち、真剣によい作品を書く努力をしている。

同人会員であるのは、その熱情による。しかし、同人会員以外の人は、そこまで真剣ではない。真剣ならば、この運動に参加するはずである。このため、意思のはっきりした同人会員の作品をより多くすることにした。

同時に、掲載する場合、同人会員以外は、一応、意思を確認する必要もあろう。追跡できずに掲載すれば、著作権の問題も起こりうるから、もちろん掲載しないのが良識である。

同人会員は、歌を多くの人に読んでもらうため、使用の許諾など全部、私に任せてくれている方々である。特に契約書などは交わしていないが、詩歌の雑誌の主宰者と同人会員の間には、そういう暗黙の了解がある。

主宰者が、同人会員の作品を用いるのは、それらの作品が世に認められるようにするためであり、同人会員はそれを認めている。それでも、歌会などに来ている方の作品は一部含んでいる。

子ども五行歌についても、了解を得ることが困難なため、諸学校で行われている子ども五行歌の作品は含ませないこととした。五行歌を書かせている学校は多く、数も膨大すぎる。したがって『五行歌』本誌に掲載しているものに限った。

五行歌の会とともに、活動している友誌『彩』の会員については、主宰の風祭智秋さんと話し合って、五行歌の会の同人会員と同様に掲載させていただいた。このことをうれしく思う。

私のやりたいようにさせて下さっている同人会員のみなさんに、深く感謝し、よい歌をこんなに数多く作って下さったことにも深く感謝する。この秀歌の数々は、この時代の珠玉として後世に語り継がれるだろうと確信する。

二〇二一年七月二十八日

目次

秀歌集4の序 1
凡例 12
巻一 宇宙・自己 13
巻二 春 29
巻三 夏 35
巻四 秋 43
巻五 冬 49
巻六 恋 59

巻七　愛　83
巻八　母　91
巻九　父　103
巻十　家族　109
巻十一　幼子・少年少女　131
巻十二　生（せい）　163
巻十三　生き物　215
巻十四　木・花・実　247
巻十五　海・山・空　261

巻十六　心　275
巻十七　思い　297
巻十八　人　315
巻十九　生活　337
巻二十　食べ物　381
巻二十一　災害・災禍　391
巻二十二　夫婦　405
巻二十三　女　425
巻二十四　男・男女　441

巻二十五　土地・風土　451
巻二十六　社会　465
巻二十七　介護・命　485
巻二十八　歴史　499
巻二十九　子ども五行歌　509
巻三十　旅・世界　517
巻三十一　芸術・歌・学　525
歌人索引　542
五行歌の歴史・五行歌を書きたい方へ　550

凡例

本選歌集は、主として二〇一六年一月から二〇二〇年十二月の間に、月刊『五行歌』等に発表された五行歌の中から、草壁焔太が選して編んだものである。（一部発表時期の異なるものも含む。）

一、作品は作者の用いた言葉そのままを尊重した。

二、作者が幼子、少年少女については、作歌当時の年齢を付した。児童については「小五」など学齢を付した場合もある。

三、作者名で読みが特殊なもの、困難なものについては、ふりがなをつけた。

四、作者が複数の筆名を使っている場合は、作者に確認して、おおむね最新の発表名とした。

五、作者地名は、索引の氏名のあとにつけた。地名についても作者の好みを尊重している。好みが不明なときは県名とした。

六、故人については、索引の地域の後に「故」と表記した。ただし、五行歌の会で確認し得た場合のみである。